

# 解釈の基礎となる古典文法 別記

## —— 事項別参考文献一覧 ——

今 井 亨

### 一 古典文法実用史の一環として

主に自らの担当する大学授業用のテキストとして2018年8月に三恵社から刊行した『解釈の基礎となる古典文法』(以下「本書」とする)は、2001年に当時勤務していた高校の授業用として作成した冊子を元に行っている。爾来、中学・高等学校、塾・予備校、大学の授業等で古典文法を扱うなかで修正を加えつつやりくりしてきたが、このたび晴れて一書とするに至った。

この間、「古典離れ」が波及してか、大学入試でも精緻な解釈力の必要性は薄れてきて、古典文の解釈は大学段階で身につける専門力とでもいう扱いになりつつあるように思う。こうしたなかで、古典文法に関する知見は、どういったかたちで継承すれば、さらに豊かなものへと展開させていけるのか。「古典文法実用史」を提唱する身として、この課題に自らも実践的に応えてみたのが、本書である。原文解釈に取り組む必要や意欲のある人向けに、事柄・状況を捉えること、現代語訳すること、意味・用法を識別することが、有機的に結びついた行為となるよう意を尽くした。

ただ、索引等も付してはならず、一書としての体裁に不備な点が少なくない。ページ数と価格との折り合いもあったわけだが、ここに「別記」として参考文献を掲げていささか補いたい。

### 二 本書全般(執筆の方針)に関わる参考文献

#### A 本書の序章にあたるもの

古典文法に対する著者の研究姿勢・考え方に関して述べたものに、次の拙稿がある。今井亨(2012)「古文読解の基盤となる学力の要素とその系統化——体系図(試案)と論点の整理——」、『国文学論考』48……古典文解釈に必要と考えられる知識事項を、主に語学面から系統的に設定してみた試論。そこに掲げた【引用・参考文献】と合わせ、これによって本書執筆の立場・方向性を定めた。

今井亨(2017)「「る・らる」の意味術語「自発」の定着まで——古典文法の実用の歴史

——」……「古典文法実用史」を宣言した論。これまで収集した「古典文法実用史料一覧」(書誌はWEBに更新して公開 [https://researchmap.jp/\\_hmn/](https://researchmap.jp/_hmn/)「資料公開」)の記述を適宜参照しつつ、本書に取り上げる事項を検討した。なお、術語「自発」の由来に関してその論中では、「あるいはこの「自発」は修正三版の段階で加えられたものかもしれない」(3.④)と述べたが、成稿後に、東京書籍株式会社附設教科書図書館東書文庫所蔵の検定申請本である、吉田彌平編『中学日本文典巻上』修正第三版(1915年)に拠って確認したところ、「る らる は 子の行末思はる 母上のみ案ぜらる の如く動作の自ら起りて止め難き意に用ふることあり。これを **自発の助動詞** といふ。」(p. 72「自発の助動詞」)とあったので、修正三版で加えられたものであったことを、いまここに補訂しておく。

## B 論説を大いに参考にしたもの

「解釈の基礎となる」という本書の趣旨に照らして示唆に富み、実用史上も興味深い言及が多く見られるものに、次の文献がある。これらは絶版でもあるため、その論説に関しては積極的に本書に採り入れ反映させるようにした。

石井秀夫(1981)『古文解釈のための文型の公式』聖文社

阪倉篤義・堀口和吉(1981)『新修文語文法 別記』京都書房

清水文雄(1999)・松村明・真下三郎監修『対訳古典文法の研究』第一学習社、初版(1973)

鈴木一雄・森野宗明(1965)『シグマ・ベスト 解明国文法』文英堂

立平幾三郎・小山義昭(1988)『要約整理 国文法』研数書院

田辺正男・和田利政(1964)『学研国文法』学習研究社

中村幸弘(2001)・碁石雅利・高橋宏幸『正しく読める古典文法』駿台文庫

村上本二郎(2000)『文法中心古典文解釈の公式 改訂新版』学習研究社、初版(1966)

## C 併用を奨めるもの

分類のしかたや原理の捉えかたが創意に富み、独自の体系を作り上げているものに、次の文献がある。これらは現刊でもあるため、その特色ある内容はそれぞれ直接に参照すべきものと考えて、本書に採るのは通説を確かめる程度にとどめた。

岩淵匡(2000)『日本語文法』白帝社

岩淵匡(2003)・坂梨隆三・林史典監修『基礎から解釈へ 新しい古典文法 三訂版 教授資料』桐原書店……「学習の指針」「指導の方法と内容」欄で学習・指導のしかたについて提言。

小田勝(2015)『実例詳解古典文法総覧』和泉書院

小田勝(2018)『読解のための古典文法教室』和泉書院

中村幸弘・碁石雅利(2012)『日本古典 文・和歌・文章の構造』新典社

山崎良幸(1966)『古典語の文法』武蔵野書院

### 三 「事項」別参考文献

本書で説いた「確認・探究・参考」事項から任意に取り上げて、さらに専門的に深めるのに有益と考えられる文献を、主に次のような方針で選んで、事項ごとに掲げる。なお、閲覧の便を考慮して、後に単行書に所収された「論文」は『単行書名』で示し（初出年）を添えておく。

□当該事項に関する論説のあゆみがふり返りやすいもの。

□実用史的・解釈論的な視点をもったもの。

#### ☆18自動詞と他動詞の対応

鈴木泰(1990)「自動詞と他動詞」、山口明穂編『別冊国文学38 古典文法必携』学燈社、p.46

#### ☆24主観客観の総合的表現とは

時枝誠記(1959)『古典解釈のための日本文法 増訂版』岩波書店、単元一三

#### ☆32他品詞への転成

北澤尚(1991)「特殊な連体構造の意味解釈について」、『東横国文学』23

三宅清(1986)「「連体形一さ」「連体形が一さ」」、『國學院雑誌』87-5

#### ☆34連用形中止法・対偶中止法

櫻井光昭(1987)「古代語における意味上の並立関係——古典読解の一つのギャジットとして——」、『学術研究 国語・国文学編』36

#### ☆35連用形中止法の序列の用法

保坂弘司(1959)『源氏物語詳解 その語法と評釈 上巻』学燈社、p.33「連用中止語法」

#### ☆37知覚・思考動詞の引用構文

橘誠(1979)「源氏物語の語法・用語例——述語格の連用形の用法(三)——〈助動詞を中心に〉——」、『田邊博士古稀記念国語助詞助動詞論叢』桜楓社、p.507

#### ☆38評価的修飾の構文

鈴木泰(1983)「中古における評価性の連用修飾について」、『日本語学』2-3

#### ☆42準体法をもとにする連体形の応用的構文

#### ④ a 連体・已然形接続の接続助詞を挟んだ主体の転換

浅野信(1979)「「ば」・「て」の承接する上下主体の異同」、『田邊博士古稀記念国語助詞助動詞論叢』桜楓社、p.11

岡田誠(2015)「国語教育における古典文の主語転換の指導法」、『國學院大學教育開発推進機構紀要』6

岡田誠(2016)「国語教育・日本語教育における見えない主語の指導法」、『國學院大學教育開発推進機構紀要』7

#### ⑥ 提示語法

大坪併治(1994)『国語史論集 上』風間書房、p.128「提示語法について——漢文訓読文と今昔物語集とを中心に——」初出(1969)

#### ☆43主観収斂の構文とは ☆44汎用性名詞句で受ける連体修飾

清水好子(1980)『源氏物語の文体と方法』東京大学出版会、p.29「異常に長い形容詞的修飾節」初出(1949)

根来司(1973)『平安女流文学の文章の研究 続編』笠間書院、p.149「源氏物語の文章——情意性形容詞終止法——」初出(1970)

保坂弘司(1959)『源氏物語詳解 その語法と評釈 上巻』学燈社、p.26「感動語法」

松尾拾(1958)「源氏物語の文法」、『日本文法講座 4 解釈文法』明治書院、p.95「頭長型構文」

#### ☆51文章の要素

井島正博『中古語過去・完了表現の研究』ひつじ書房、p.109「地の文と会話文——丁寧語ハベリと係助詞ナムの機能——」初出(2005)

#### ☆52草子地

小松正(2005)「語り手が顕在化した地の文——『源氏物語』と中世王朝物語——」、佐藤喜代治博士追悼論集刊行会編『日本語学の蓄積と展望』明治書院、p.322

中野幸一(1977)「『源氏物語』における強調・感動・傍観の草子地」、源氏物語探究会編『源氏物語の探究 第三輯』風間書房、p.69

野村精一(1977)「草子地の語法について——源氏物語の表現空間(二)——」、源氏物語探究会編『源氏物語の探究 第三輯』風間書房、p.89

森本深菜美(2015)「『落窪物語』の草子地——語り手像を中心に——」、『尾道市立大学日本文学論叢』11

#### ☆54自発の訳語

今井亨(2016)「古典文法の訳語の整理——自発「る・らる」——」、『解釈』62-11・12

尹順徳(2007)「自発表現としての「てしまう」文」、『国語学研究』46

長江稔(1984)「更級日記の「自発」の助動詞」、『解釈』30-2

#### ☆55上代語「ゆ・らゆ」

根来司(1977)「源氏物語における「給ふ」「給ふる」の考察」、源氏物語探究会編『源氏物語の探究 第三輯』風間書房、p.121「二」

#### ☆58自発の「とどめがたい感」

河野武(2018)「日本語の受動と自発に見られる被作用の平行性」、『大妻女子大学紀要 文系』50

白川博之(2018)「日本語研究から日本語教育研究への越境」、『日本語の研究』14-2

#### ☆65尊敬「る・らる」の敬意の度合い

黒沢幸子(1978)「尊敬助動詞「る・らる」の用法——『古今著聞集』を中心として——」、『文学論藻』53

#### ☆66尊敬語に下接する「る・らる」 ◇8◇尊敬語動詞+「る・らる」型の語と意味

辛島美絵(1993)「「る・らる」の尊敬用法の発生と展開——古文書他の用例から——」、『国語学』172

関谷浩(1988)「「召さる」という表現をめぐって」、『此島正年博士喜寿記念国語語彙語法論叢』桜楓社、p.323

森昇一(1992)・中村幸弘他編『平安時代敬語の研究』桜楓社、p.92「「仰せらる」の敬語化」初出(1969)、p.232「尊敬動詞に下接する助動詞「る」「らる」について」初出(1984)、p.248「「御覽ぜらる」考」初出(1985)

#### ☆67軍記物語に見える使役

近藤政美(1989)『中世国語論考』和泉書院、p.344「助動詞「す」「さす」の受動を表わす用法について」初出(1972)(1973)

#### ☆93地の文の「けり」

藤井俊博(2016)『院政鎌倉期説話の文章文体研究』和泉書院、第一部

#### ☆94詠嘆の「けり」

久保木哲夫(1978)「すでに知っていることといまはじめて知ったこと——「なりけり」の用法——」、上村悦子編『論叢王朝文学』笠間書院、p.655

#### ◇9◇「き」と「けり」の用法についての諸説

井島正博(2011)『中古語過去・完了表現の研究』ひつじ書房、p.349「古典語過去助動詞の研究史」初出(2001)

加藤浩司(1998)『キ・ケリの研究』和泉書院、p.215「キ・ケリの研究史概観と問題点の

整理——付、編年体研究文献目録——」初出(1997)

☆96完了の基本訳は「～た」ではない

重見一行(2001)「現代語訳を通して見た中古助動詞「ぬ」の表現意義」、『前田富祺先生退官記念論集 日本語日本文学の研究』

◇10◇「つ」と「ぬ」の違いについての諸説

井島正博(2011)『中古語過去・完了表現の研究』ひつじ書房、p.435「古典語完了助動詞の研究史」初出(2005)

此島正年(1985)「古代完了辞の命令形」、『国語研究』49

三宅清(1991)「準体と連体——助動詞「つ」「ぬ」をめぐって——」、『研究集録 岡山大学教育学部』87

渡瀬茂(2013)『王朝助動詞機能論 あなたなる場・枠構造・遠近法』和泉書院、p.175「源氏物語における臨場的場面の「つ」と「ぬ」」初出(1993)

☆104上接動詞の種類と「完了」

小矢野哲夫(1982)「国語学におけるテンス・アスペクト観の変遷」、『日本語学』1-2

◇11◇上接動詞の種類による「たり・り」意味の識別法

井島正博(2011)『中古語過去・完了表現の研究』ひつじ書房、p.149「中古語完了助動詞の体系」初出(2007)

近藤明・橋本直美(1995)「動作動詞がヌ形をとる場合——「泣く」「笑ふ」「ぬむ」——」、『金沢大学教育学部紀要 人文科学・社会科学編』44

◇13◇推量・推定系助動詞の体系

浅見徹(1969)「推量系助動詞の分布」、『国語国文』38-10

遠藤和夫(1988)「助動詞の体系——文語・推量の助動詞を例として——」、『和洋国文研究』23

近藤泰弘(2000)『日本語記述文法の理論』ひつじ書房、p.457「中古語におけるモダリティの助動詞の体系」初出(1991)

野村剛史(1995)「ズ、ム、マシについて」、『宮地裕・敦子先生古稀記念論集日本語の研究』明治書院、p.2

藤原浩史(2004)「過去の助動詞の意味構造——「き」「けり」「けむ」「まし」における真偽判定の機構——」、『国語学研究』43

吉田茂晃(2017)「生徒に嫌われない古典文法指導を目指して——「推量」の助動詞を面白がる——」、『天理大学学報』69-1

☆107文における位置と主語の人称

草川昇(1986)「助動詞「む」の意味」、『鈴鹿工業高等専門学校 紀要』19-2

時枝誠記(1954)『日本文法 文語篇』岩波書店、p.170「用法」

#### ☆108文中用法の婉曲

小松光三(1992)「体言に連なる助動詞「む」の表現——『枕草子』の場合——」、『国語と国文学』69-11

三宅清(1991)「古語辞書の意味記述——助動詞「む」の連体形について——」、大友信一博士還暦記念論文集刊行会編『辞書・外国資料による日本語研究』和泉書院、p.219

#### ☆116原因推量と推量の焦点

浅見徹(1966)「助動詞の展開——「らむ」の場合——」、『岐阜大学研究報告 人文科学』14

岩淵匡(1970)「けむ」「らむ」の意味——いわゆる原因推量に関して——」、『月刊文法』2-8

北原保雄(1993)「「らむ」留めの歌における既定と推量——原因などを推量する意味はどこから生じるか——」、『小松英雄博士退官記念日本語学論集』三省堂、p.101

黒田徹(2007)「文法研究資料としての万葉集・古今集」、『国文学解釈と鑑賞』72-1

野村剛史(1997)「三代集ラムの構文法」、川端善明・仁田義雄編『日本語文法 体系と方法』ひつじ書房、p.191

#### ☆124反実性の「まし」と背後に隠れた意味

中西宇一(1996)『古代語文法論 助動詞篇』和泉書院、p.243「反実仮定の表現——「まし」の意味構造」初出(1966)(1970)

丹羽田鶴子(1968)「源氏物語における推量の助動詞「まし」——反実と予想——」、『女子大國文』49

#### ☆142詠嘆の「なり」

高山善行(2002)『日本語モダリティの史的研究』和泉書院、p.135「ナリ論争の学史的意義」

#### ☆143「らし」の根拠ある推定

大鹿薫久(1997)「助動詞「らし」について」、『語文』67

中西宇一(1996)『古代語文法論 助動詞篇』和泉書院、p.219「「らし」と「らむ」の推量性」初出(1964)

#### ☆148婉曲性の必然性

小松登美(1955)「助動詞めりの起源について」、『跡見学園紀要』2

#### ☆149「めり」の複雑な解釈

阿久澤忠(1993)『源氏物語の語法と表現』国研出版、p.9「助動詞「めり」の性格——その口語性について——」初出(1982)

尾方理恵(1995)「助動詞の形と意味——源氏物語中の「めり」「終止なり」——」、『築島裕博士古稀記念国語学論集』汲古書院、p.271

川岸克己(1998)「〈非主体的〉推量判断としてのメリ推量」、『作新国文』9

郷真理子(1986)「推量の助動詞「めり」の諸相——『源氏物語』を中心として——」、『二松学舎大学人文論叢』33

田中律子(1981)「平安文学を中心とした助動詞「めり」について」、『国語国文薩摩路』26

中川浩文(1985)『源氏物語の国語学的研究 中川浩文論文集 下巻』思文閣出版、p.235

「源氏物語の推量の表現における「めり」——地の文におけるその表現意識——」初出(1964)

松山陽子(1967)「中古文学における助動詞「めり」」、『藤女子大学国文学雑誌』2

#### ☆153事情説明の「なり」

田島光平(1971)「玉の小櫛の「なりけり」の説——連体形承接の「なり」の一用法——」、『国語と国文学』48-12

#### ☆170主格の表出・非表出

中村幸弘(1992)「主格辞「の」の表出・非表出について」、『野州国文学』50

#### ☆173中止法の「の」

佐伯梅友(1988)『古文読解のための文法 上』三省堂、p.80「「いわゆる同格の関係(乙)」に用いられる「の」に似た意味の「の」について」

#### ☆181再叙法

池田和臣(2002)「源氏物語の文体形成——仮名消息と仮名文の表記——」、『国語と国文学』79-2

#### ☆183条件接続

矢島正浩(2003)「条件表現史研究が抱える問題」、『国語語彙史の研究22』和泉書院、p.151

#### ☆185接続助詞「ば」の接続と用法

山口堯二(1980)『古代接続法の研究』明治書院、p.99「假定表現の類型と諸相」初出(1970)

#### ☆189確定条件の二用法

今井亨(2007)「古典文法の術語の整理——「已然形+ば」の用法——」、『国文学論考』43

#### ☆192「もの」派生の四語

木下正俊(1974)「「ものを」覚書」、五味智英・小島憲之編『万葉集研究3』塙書房、p.253

#### ☆193逆順の曲折構文とは

宮崎由紀(1986)「逆接の接続助詞「ど」「ども」の意味と用法——「——ど(も)——ば——」の構文を中心にして——」、『愛文』22



### ☆194格助詞から転成した接続助詞「を・に・が」

京極興一(1987)「接続助詞「に」「を」「が」の成立と展開」、山口明穂編『国文法講座 3 古典解釈と文法—助詞の機能』明治書院、p.190

近藤泰弘(2000)『日本語記述文法の理論』ひつじ書房、p.421「接続助詞「を」の発生時期」初出(1986)

### ☆195接続助詞「を」と対象を表す格助詞「を」

三宅清(1990)「古典語の解釈について——準体を中心として——」、『岡山大学国語研究』4

山口明穂(1984)「いま助動詞・助詞研究で何が問題か」、『国文学』29-8

### ☆197接続助詞「が」と主格を表す「が」

高橋良久(2009)「翻弄させる『が』——『源氏物語』冒頭文にある『が』の解釈の変遷——」、『國學院雑誌』110-2

### ☆198接続構文とは

小松英雄(1997)『仮名文の構文原理』笠間書院、p.232「仮名文の構文原理」初出(1988)

塚原鉄雄(2002)『国語構文の成分機構』新典社、p.163「鎖型の構文」初出(1956)

### ☆199客観的描写「ば」と主観的連想「に」

今井亨(2010)「古典文法の用例の整理——「已然形+ば」の〈気づき〉の用法——」、『国文学論考』46

今井亨(2011)「「見れば」と「見るに」が導く叙述の展開——古文の接続表現理解の一視点——」、『解釈』57-11・12

大沢正善(2009)「「柿くへば」の「ば」、『岐阜聖徳学園大学国語国文学』28

小松光三(1988)「接続助詞の意味と用法——「ば」の場合——」、『愛媛国文研究』38

西尾光雄(1969)『日本文学史 中古篇』塙書房、p.19「中古日本文学史への一視点」

藤井俊博(2016)『院政鎌倉期説話の文章文体研究』和泉書院、p.259「Ⅲ C 人物共感視点(視覚・聴覚)」初出(2005)

### ☆200「て」の用法

新里博樹(1994)「接続助詞「て」の表現性——連用形中止法との対比——」、『淑徳短期大学研究紀要』臨時号

山口堯二(2000)『構文史論考』和泉書院、p.29「中古語の「て」連用句とその周辺」初出(1998)

### ☆204句の包摂

小田勝(2006)『古代語構文の研究』おうふう、p.271「接続句の制約からみた中古助動詞の分類」初出(1994)

此島正年(1978)「文構成の変遷」、『国文学論考』14

近藤泰弘(2005)「平安時代語の副詞節の節連鎖構造について」、『国語と国文学』82-11

☆213他と区別して特に取り立てて示す「は」

尾上圭介(1981)「「は」の係助詞性と表現的機能」、『国語と国文学』58-5

☆218疑いと問い

磯部佳宏(1990)「中古和文の要説明疑問表現——『源氏物語』を資料として——」、『日本文学研究』26

磯部佳宏(1997)『『とはずがたり』の疑問表現（上）——要説明疑問表現の場合——』、『日本文学研究』32

磯部佳宏(1998)『『とはずがたり』の疑問表現（下）——要判定疑問表現の場合——』、『日本文学研究』33

岡崎正継(1997)『国語助詞論攷』おうふう、p.3「疑問表現形式と助詞」初出(1968)

小野葉子(1998)『『春色梅児誉美』の疑問表現——「問いかけ」と「疑問」の形式の交渉——』、『青山語文』28

森昇一(1992)・中村幸弘他編『平安時代敬語の研究』桜楓社、p.398「助詞ヤ・カの意味——「疑問」説をたづねて——」初出(1977)

☆219疑いの弱い「や」とは

岡崎正継(1970)「解釈上の問題点——古文の場合——」、『月刊文法』2-5

川上徳明(1975)「中古仮名文における命令・勧誘表現体系」、『国語国文』44-3

宮崎和人(2005)『現代日本語の疑問表現 疑いと確認要求』ひつじ書房、p.75「認識的モダリティとしての〈疑い〉」

☆220疑問語による係り結び ☆234疑問語による係り結び

高瀬正一(1992)『『平家物語』における疑問詞の係り結び』、田島毓堂・丹羽一彌編『日本語論2 古典日本語と辞書』和泉書院、p.215

◇33◇「や」と「か」の違いについての諸説

近藤泰弘(2000)『日本語記述文法の理論』ひつじ書房、p.227「中古語の係助詞「なむ」の特性」初出(1979)

野村剛史(2001)「ヤによる係り結びの展開」、『国語国文』70-1

半藤英明(2003)『係助詞と係結びの本質』新典社、p.147「「か・や」構文の意味と意義」初出(2002)

◇34◇「ぞ」と「なむ」・「こそ」の違いについての諸説

小田勝(2006)『古代語構文の研究』おうふう、p.218「異なる係結が重出する文」初出(2004)

蔵野嗣久(1993)『中世日本語論考』溪水社、p.161「係結びの法則の崩壊過程の研究」  
近藤泰弘(2000)『日本語記述文法の理論』ひつじ書房、p.275「中古語の疑問文」初出(1987)  
長尾高明(1987)「古文解釈と助詞——強調表現について——」、山口明穂編『国文法講座 3 古典解釈と文法—助詞の機能』明治書院、p.1  
西田隆政(2004)「平安和文における地の文の係り結び——源氏物語若菜上巻を資料として——」、『甲南女子大学研究紀要 文学・文化篇』40  
半藤英明(2003)『係助詞と係結びの本質』新典社、p.163「新たな係結び論の構築」初出(2003)  
松岡千賀子(2012)「「消息」「会話」に於ける係助詞の相違——平安前期・『落窪物語』を中心として——」、『学習院大学国語国文学会誌』55  
森野崇(2002)「係助詞「こそ」の機能とその変容の要因に関する考察」、『国語学 研究と資料』25

#### ◇35◇断定「ぞ」と「なり」の違いについての諸説

妙摩光代(1979)『『中華若木詩抄』に見る文末の「也」と「ソ」』、『田邊博士古稀記念国語助詞助動詞論叢』桜楓社、p.711  
森野崇(1992)「平安時代における終助詞「ぞ」の機能」、『国語学』168

#### ☆228自己の希望と他への希望

森脇茂秀(2009)「希望表現史小考——「源氏物語」の「ばや」を中心に——」、『別府大学国語国文学』51  
森脇茂秀(2000)「希望の助辞「もがな」「がな」をめぐる(一)」、『別府大学国語国文学』42

#### ☆231「めあて」の二つの方向性

近藤政行(1996)「動詞命令形の機能」、『徳島文理大学比較文化研究所紀要』12

#### ☆245もう一つの謙讓語

関谷浩(1982)「古典教育における敬語——特に、所謂謙讓語を中心に——」、『駿台フォーラム』創刊号

#### ☆249名詞の敬語表現

大久保一男(1995)『源氏物語の敬語法』おうふう、p.27「「御」の使用と用言性敬語の不使用」初出(1991)  
望月郁子(1970)「源氏物語における敬称の接頭辞ミについて」、『文学』38-3  
吉田永弘(2008)「源氏物語の「御」——自体尊敬の存否——」、『國學院雑誌』109-10

#### ◇42◇敬語のかたちと敬意の程度の差

中村一夫(1995)「平安和文における「おぼしめす」の表現価値——源氏物語を中心に——」、『樟蔭国文学』32

藤原浩史(1994)「漢語サ変動詞「御覧ず」の表現価値」、『国語学』176

#### ◇43◇二方面の敬語の敬意の対象

渡辺英二(1981)「中古敬語と現代敬語——「謙讓語」について——」、宮地裕他編『講座日本語学 9 敬語史』明治書院、p.140

#### ☆254敬意遞減の法則

石井文夫(1973)「尊敬語「一せ(させ)おはします」について——その敬語史的検討——」、『国文学 言語と文芸』76

川岸敬子(1994)「わたらせ給ふ」と三重敬語」、『十文字学園女子短期大学研究紀要』25

高橋良久(2010)「中世王朝物語」における存在詞「ものしたまふ」と存在詞「わたらせたまふ」、田島毓堂編『日本語学最前線』和泉書院、p.325

#### ☆259「行く」と「出づ」の謙讓語の相互関係

此島正年(1972)「「まかる」考」、『國學院雑誌』73-1

#### ☆261受身文・使役文における敬意の対象

桜井光昭(1990)「古典語特有の敬語表現」、山口明穂編『別冊国文学38 古典文法必携』学燈社、p.91

田中由紀子(1988)「いわゆる「受け手尊敬」の「受け手」について」、『叙説』15

#### ☆262敬語のさまざまな価値・効果

森野宗明(1990)「敬語の用捨と古典解釈」、山口明穂編『別冊国文学38 古典文法必携』学燈社、p.83

付 本書の用例文は、主に『新編日本古典文学全集』等の定評ある古典叢書類や大学入試に出題された問題文に拠ったが、漢字の使用、送り仮名、読点等の表記は、読みやすいかたちに改めた。